

～想定しなかった新たな出発～

ひよんなことから、想定もしなかった「書く」というミッションが降りてきた。

赤坂憲雄氏の掲げた「奥会津ミュージアム構想」には料理というテーマがあるというではないか。料理を作ることも食べることも大好きな私は、そんなお手伝いをさせてほしいなど、気軽に話したのが間違いのはじまりだった。

「作るのではなく、まず書いてほしい」と編集担当女史が言う。

「え？いやいや、書けませんけど私・・・」。

編集女史はそれには答えず笑顔のまま、「ではお願いします。」と他の話題に移ってしまった。

これは試練か、はたまたチャンスか…。いやいや、私には文才はないし、表現力もない。まして自分の世界観など、机の中もカバンの中も探したけれど見つからない。

料理は好きだけれど、今の等身大の自分が本当に書きたいことなのか、そしてそれは自分でなくては書けないことなのか。

なんだか違う気がする。では、今の自分が伝えられることって何だろう。

モヤモヤとした思いを抱えていた時に、赤坂先生を昭和村から三島町にお連れするという役目を仰せつかった。その車中…。

私はとても緊張して運転していた。赤坂先生をお乗せしているのだから、万が一のことがあってはならない。最大の緊張は「なにか、難しい話をされたらどうしましょう。」何しろ私は、先生の本を一冊も通読していない。

しかし、先生は優しかった。たった今見てきた古民家について、私の頭でも飲み込めるように話しをしてくださったので、私も少しずつ落ち着いてきた。先生の声、とても素敵だなあ～なんて思いながら、変な汗もだんだんに流れなくなってきたころ、奥会津ミュージアムの話になった。

私は思い切って、この前から考えていたことを先生に話してみた。

「奥会津はどこの町村も高齢者が多く、それぞれの町村に老人ホームや高齢者向けの介護サービスがあり、最近では「奥会津在宅医療センター」も出来て、年々高齢者向けの介護や医療の事情も変化してきています。奥会津ミュージアムでもそういう生活に結び付いた情報を提供するのはどうでしょうか？」

「そういう情報も必要だし、『老い』は避けては通れないことだからね。でも書き手がなかなかいないんだよね」。

先生は、すでに介護の周辺のことも考えておられた。

私は思わず、

「えーっと、それ、私に書かせていただけませんか？（わあ、言っちゃった!）」

私は、平成二年から平成三十年まで、施設や在宅の高齢者介護や地域福祉の分野の職場に勤務していた。たくさんのお年寄りやご家族の方と接し、在宅介護について相談を受けたり、一緒に悩んだり、施設で生活されているお年寄りに想いを寄せたりしながら仕事をさせていただいた。年々変化する介護保険制度に翻弄されながらも、その時々、目の前のお年寄りあるいは介護する方に自分なりの精一杯で対応してきたつもりだ。そのことを懸命に話したような気がする。

赤坂先生の答えは「OK」だった。ハナマルみたいなOKだった。

そんなわけで、私のテーマは奥会津の今日的介護事情。ご高齢になられたり、事故や病気でリハビリや介護が必要になったときに、ここ奥会津ではどういう支援が受けられて、どんなサービスがあって、事業所ごとにどんな特徴があるのか。それから今まで介護してきた人の体験談とか、色んな介護サービスを利用しているお年寄りの声とか、介護現場で仕事をしている人の想いとか、そんなことをあまり重くならず書いてみたいと思う。

自分なりの精一杯の思いを込めて。